

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長

「平和のために行動する」若い世代が広島に集う



「第2回全国こども平和サミット」
フェニックスホールを
埋める参加者



「第2回全国平和学習の集い」
アイスブレイク



「第2回全国平和学習の集い」
全体写真



「第2回全国平和学習の集い」
グループディスカッション



「第2回全国こども平和サミット」
私たち若い世代の平和の誓い



「第2回全国こども平和サミット」
なかみついずみ
中満泉国連事務次長
(軍縮担当上級代表)挨拶

目次

写真:「平和のために行動する」若い世代が広島に集う	①	ヒロシマ平和学習受入プログラムー第2回全国平和学習の集いー	⑥
「中学生の平和意識体験継承・社会参画に向けて」(村上登司文)	②	資料館企画展「新着資料展」／	
被爆体験記「家族と私の被爆体験」(辻靖司)	③	「ハノーバーの日」・「モントリオールの日」	⑧
ヒロシマ平和学習受入プログラムー第2回全国こども平和サミットー	④		





「中学生の平和意識 —体験継承・社会参画に向けて」

村上 登司文
京都教育大学 名誉教授

〔むらかみ としふみ〕

広島県生まれ。ブラッドフォード大学平和学MA。京都教育大学名誉教授。現在、日本平和教育学会会長。著書に、『平和教育研究』（明石書店）、『戦後80年目における中学生の平和意識』『京都教育大学紀要』など。

2020年代に入り、戦争体験者が急減する過渡期を迎え、SNSによる情報化や国際秩序の不安定化が一気に進み、平和教育は新たな課題に直面しています。現在の小中高校生にとって、戦争体験者は曾祖父母の世代となっています。戦争体験者からは、その子は第2世代、孫は第3世代、ひ孫は第4世代にあたり、学校での平和教育は、すでに戦争体験第4世代に対するものとなりました。

筆者は、過去28年間にわたり、東京、京都、広島、那覇の4都市で中学2年生（1000人規模）に対して4回調査を実施しました。調査期間の28年の間、中学生は平和主義的な意識を継続的に保持しています。しかし、2025年調査では生徒の平和主義的な意識が弱くなる傾向が見られました。その一方で、広島・長崎の被爆体験を世界に継承することを大切と思う割合が、次第に増えています。

正義の戦争論に反対（「反対」+「少し反対」）と答えた生徒は、1997年調査では57.3%いましたが、2025年調査では47.7%となりました。正義の戦争論は中学生たちに支持されていないが、調査期間の28年の間に、正義の戦争論に反対する生徒は減っています。表1の得点を見ていくと、-0.83から-0.49へと上昇し、2025年調査での上昇が目立ちます。2025年調査では正義の戦争論に対して「反対」の割合と、どのような戦争もすべきでないと「思う」割合とが、同時に減少しており、平和主義的な意識の低下が明らかとなりました。

た。中学生の戦争観は、出会う大人たちの戦争観や接する情報に影響されています。影響を及ぼしたと思われる世界情勢として、2022年からのウクライナ戦争があり、大国ロシアによる侵略に対してウクライナが防衛するという位置づけが広く共有されました。ヨーロッパや中東で戦争が起こり、国際状況が大きく悪化する中で、中学生の平和意識は変化しています。

その一方で、被爆体験の継承の重要性が共有されています。中学生調査では、被爆体験を世界の人々に伝えることが大切と「思う」生徒の割合は、1997年調査の時点で既に66.6%ありました。2016年調査では前回調査より増加し、2025年調査では77.7%に達しました。表1の得点では1.34から1.65となり、28年間で着実に増加しています。調査地の4都市のいずれでも、被爆体験継承の重要性が生徒たちに浸透しており、若い世代に被爆体験の継承意識が形成されています。広島の子は、他の調査地と比べて、「核兵器の存在」を平和でない理由として多く挙げています。また、広島の子は「正義の戦争論」を認めない傾向があると言えます。

戦争体験第4世代に対する平和教育の枠組として、歴史的体験の継承と主体的な社会参画を統合する取組として「体験継承・社会参画モデル」を提示できます。体験継承・社会参画モデルとは、戦争体験の証言継承を市民的参加と接続し、記憶の継承を能動的な社会参加へと転化させる平和教育モデルです。この平和教育では、講話型のように語り手から一方的に伝えるので

表1 中学2年生の平和意識得点の変化

質 問	1997年調査	2006年調査	2016年調査	2025年調査
①正義の戦争論について	-0.83	-0.77	-0.72	-0.49
②被爆体験継承について	1.34	1.45	1.59	1.65

注：質問①「戦争の中には侵略戦争のように悪い戦争と、国を守るよい戦争（正義の戦争）があるという意見を、あなたはどう思いますか」に対する生徒の回答を、賛成2点、少し賛成1点、少し反対-1点、反対-2点、どちらも言えない0点、により得点化した。

質問②「あなたは広島や長崎の『被爆体験』を世界の人々に伝えることを大切と思いますか」に対する生徒の回答を、思う2点、少し思う1点、あまり思わない-1点、思わない-2点、どちらも言えない0点、により得点化した。

はなく、話し手と聞き手の双方向で対話を進め、課題解決を考え、平和創造が目指されます。近年広島市が行っている若者たちの同世代による交流を通じた平和学習は、体験継承・社会参画モデルに沿ったものです。この体験継承・社会参画モデルでは、戦争（原爆被爆体験や、各地域の戦争体験）についての教育だけではなく、平和な社会を形成する力を育てようとしています。つまり、生徒たちは、戦争被害者の声を通して、戦争の実相や平和への思いに触れ、平和を遠い理想としてではなく、平和を創り出す方法を考えます。平和教育のこうした体験的アプローチにより、共感と価値判断

力を育み、平和創造に向けて、自分事として社会参画に関わります。

中学生への意識調査のデータから、被爆体験を伝えようとする継承意識の広がりを確認できました。また、広島市における近年の平和学習の実践において、対話・交流・発信といった取組の広がりが見られます。地域社会と学校教育が協働する平和教育は、広島市や長崎市だけでなく、体験継承・社会参画モデルとして、世界に通用する平和教育の普遍的なモデルとなることが期待されます。

(2026年8月)



被爆体験記

家族と私の被爆体験

辻 靖司

本財団被爆体験証言者

〔つじ せいじ〕

1942年3月、呉市生まれ。3歳5か月の時、母に背負われ、被爆した兄を探して広島市内に入る。現在は被爆体験証言者、被爆体験伝承者、ヒロシマ・ピース・ボランティア、平和学習講座講師として活動している。

私は1942年3月生まれで、原爆投下時は3歳5か月でした。当時は呉市に住んでおり、家族は39歳の母、20歳の長兄、16歳の二番目の兄、9歳の姉、7歳の兄、そして私の6人家族でした。

当時20歳の長兄は、爆心地から約1.3kmの広島市白島町で動員学徒の事務作業に従事しており、木造家屋の中で被爆しました。めちゃくちゃに壊れた木造家屋の下敷きになりましたが、わずかな空間に守られ、柱やガレキをかき分けて自力で脱出できたのは全くの幸運でした。足や手のあちこちにはけがをしましたが、大きな外傷はありませんでした。外へ出ると周りの建物はすべて押しつぶされ、「遠くの宮島の山が見えたのには驚いた！大きな爆弾が落ちたのだと思った！」と、兄は当時のことを話していました。しかし、原爆の恐ろしい被害の一つに放射線による被害があります。至近距離で被爆した長兄は放射線をたっぷりと浴びたことになります。

原爆投下から数日後、母は3歳5か月だった私を背負い、長兄を探すため、呉から広島へ向かいました。広島駅で列車を降り、焼け野原となった市内を一日中探して歩きました。私の記憶には、相生橋辺りから川沿いを北へ向かって歩いたこと、その時に見た鉄橋の光景が、特に印象に残っています。当時は、すべて焼け野原で市内にほとんど人は歩いていませんでした。母と私は救護所や人が集まっている場所を重点的に探し

ました。私は母の背中で「まだ見つからんの。まだ見つからんの。」と、繰り返し聞いていました。

夕暮れ時と思われる頃、爆心地から約1.6kmの常盤橋の川岸の石段にいた兄を見つけました。当時の兄は、ボロボロの服を着て、とても疲れていたように記憶しています。生死の分からない我が子を見つけた母は、この上ない喜びを全身に表していました。一日中探して歩いた疲労や心痛も一度に吹き飛んだようでした。いま考えると、3歳5か月の私をおんぶし、原爆投下後のごたごたの道を歩きながら、生死の分からない我が子を探した母は、どんなにつらく心苦しかっただろうと思います。

長兄は命こそ助かりましたが、大量の放射線を浴びたことにより、その後も体調が優れなかったようです。「原爆ぶらぶら病」と呼ばれた症状に苦しみ、兄はいつも「しんどい！しんどい！」と言っていました。また、被爆者ということで、会社員生活でもあってはならない差別的な言動を受け、恋愛や結婚においても偏見や風評差別など、精神的な苦痛を多く体験したことを私も見聞しました。

30歳を過ぎた頃、兄は創業100年以上の優良企業を退職し、その後はアルバイトをしながら生活しました。休日には、朝からお酒を飲んで横になって休む、だらしない生活でした。私は兄の生活態度が理解できず、母に何度も注意してほしいと頼みました。何度も

何度も頼んでいたある日のことです。母は涙を流しながら、「お願いだから、お兄ちゃんの好きなようにさせてやってほしい。」と私に一生のお願いだからというような懇願をするのです。

現在の私は、放射線後障害の影響について学び、兄が「原爆ぶらぶら病」で苦勞したことを理解できるようになりました。母も、兄が爆心地から1.3kmという至近距離で被爆し、多くの放射線を浴びていたので、長くは生きられないだろうと思っていたのではないかと想像します。兄は、残された人生を好きなように生きたかったのだと思います。母もそのようにさせてやりたかったのだと思います。

あの頃の自分を思い返すたびに、「お兄ちゃん、あの時はごめんなさい。」と心から謝りたい気持ちでいっぱいです。先祖のお墓参りをした際には、兄に心からお詫びをしました。その後、兄は40歳を過ぎた頃、理解のある方との良縁に恵まれて結婚し、一人の男の子にも恵まれました。その点は幸せなことだったと思います。そして、82歳の時に胃がんで亡くなりました。

被爆体験証言者として活動することを考え始めた当初、私は「大きな外傷もない自分が、被爆体験を語ってよいのだろうか。」と迷っていました。しかし、広島市職員の方々から、「3歳5か月で被爆した体験にも伝える意義がある。」と励ましていただきました。そ

の言葉に背中を押され、私も自分の体験を伝えていこうと思うようになりました。

また、被爆体験証言者が差別的な言動や誹謗中傷を受けていることを知り、大きな衝撃を受けました。振り返ってみると、私の家族も同じような経験をし、私自身も長兄に理解のない言動をしていました。まず自らが反省し、行動への一歩を踏み出すことが、被爆者への差別や誹謗中傷をなくし、核兵器廃絶と恒久平和の実現につながると考えました。

私自身も、母と一緒に焼け野原となった広島市内を一日中歩き、残留放射線を浴びました。現在も、血小板の数値が少ないため、けがをすると出血が止まるまで時間がかかることがあり、日頃から注意しています。3か月に1度の血液検査や甲状腺機能検査も受け、健康管理に努めています。今後も健康に留意しながら、核兵器廃絶と恒久平和を訴える平和継承活動に取り組んでいきたいと思っています。

平和継承活動は決して難しいものではありません。講演会に足を運ぶことや署名活動に参加すること、そして被爆の実相を語り継ぐことなど、私たち一人一人にできることがあります。こうした一つ一つの行動が広がることで、核兵器廃絶への大きな道筋ができるのではないのでしょうか。

ヒロシマ平和学習受入プログラム ー第2回全国こども平和サミットー

はぴす!
HAPPY × PEACE

8月6日の平和記念式典終了後に開催し、74自治体(22都道府県)のこどもたち777人、引率者293人、広島市のこどもなど162人、総計1,232人が参加しました。

また、司会に加え、受付や参加者の案内など、ユース・ピース・ボランティアが運営スタッフとして活躍しました。

冒頭、中満^{なかつみ}泉^{いづみ}国連事務次長(軍縮担当上級代表)の御挨拶で、広島が被爆者を中心に、「希望が創れるんだ。」ということを長く、強力に世界に発信してきたことに触れられ、若い世代に向けて、「平和を創るために何ができるのか考えて欲しい。」「自分事として平和のために努力し、行動に移してほしい。」というメッセージをいただきました。続いて、広島特別支援学校高等部普通科職業コースの生徒が、平和への

メッセージを画面に投影しながら、「点描の唄」の合唱を行い、サミットがスタートしました。「平和は楽しい。」という生徒からのメッセージが印象的でした。



広島特別支援学校高等部普通科職業コースの合唱

第1部の「被爆体験を学ぼう」では、河野キヨ美さんが講話を行いました。続いて、追悼平和祈念館の被爆体験記朗読ボランティアの朗読を聴き、参加者全員で、詩「げんしばくだん」を音読しました。原爆の悲惨さや被爆者の思いを共有する場となり、平和への思いを一層強くしました。

第2部の「平和のバトンをつないでいこう」では、市原市平和大使（千葉県）が平和大使の活動で学んだことや未来への思いを発表したほか、広島市立安佐中学校の生徒が詩「八月六日」を群読しました。また、広島市立広島商業高等学校と長崎市立長崎商業高等学校の生徒は、平和への思いを込めた商品の販売など、商業高校の特徴を生かした平和貢献活動を紹介しました。会場の参加者も、ステージを見つめながら熱心に発表に耳を傾けていました。



市原市平和大使の発表

また、今回から新たに、「私たち若い世代の平和の誓い」と題して、全国9自治体のこども代表が「平和のために私たちができること」を発表しました。台風の影響により参加できなかった沖縄市の発表は、ユース・ピース・ボランティアが代読しました。最後に、ユース・ピース・ボランティアが「被爆者の皆さん、安心してください。」と呼びかけ、日本中から集まり平和を誓い合った仲間の存在に触れ、「世界中の80億の人々と手を携え、お互いを理解し、幸せになるよう努力していくことを、ここに誓います。」と決意を述べました。

【自治体名と発表タイトル】

- ・北海道知内町「僕が思う平和」
- ・茨城県大洗町「同世代のこどもたちと一緒に」
- ・栃木県日光市「私が思う平和について」
- ・千葉県佐倉市「誰かのための平和の輪」
- ・千葉県白井市「今できること」

- ・長野県諏訪市「小さな優しさの積み重ね」
- ・長野県箕輪町「日常こそ平和の原点！」
- ・沖縄県沖縄市「命ある喜びを紡ぐ未来へ」
- ・ユース・ピース・ボランティア「80億の人々と手を携えて」



（各発表の詳細は、平和学習課HPで御覧いただけます。）

参加者アンケートの一部を御紹介します。

＜参加したこどもたち＞

- ・被爆者の話や同世代の平和への誓いを聞いて、平和への願いが強くなり、自分ができることを改めて学ぶことができた。いじめがだめなことや対話の積み重ねが大切だということが再確認できた。
- ・平和について深く考えるきっかけをもらうことができてうれしかった。一人一人の命に物語があり、受け継ぐ私たちにも繋いでいく義務があると感じた。学校や家で、積極的に平和について伝えていきたい。
- ・平和を大切に思い、望んでいる同世代がこんなにもたくさんいることが分かってびっくりした。みんなで力を合わせて平和を創る行動を起こしていきたいと思った。
- ・原爆詩の朗読が心に響いた。被爆者の苦しみや感情が伝わり、感動した。また、参加者全員が朗読することで、みんながサミットに関わることでよかった。

＜引率者＞

- ・広島から遠く離れた場所で暮らしていると、どこか平和は他人事の話になっているように感じるが、被爆者の話を直接聞いて、戦争や原爆の悲惨さが本当にあった出来事として実感できた。とても心に響いた。
- ・自分たちが平和大使であり、地元に帰り、平和学習のリーダーになることの自覚が強くなったと感じる。また、同世代の発表を聞き、刺激になったようだ。
- ・広島派遣の前後でこども達の表情に変化が見られ、戦争の悲惨さや平和の尊さについて深く学び、充実した研修となったことがうかがえた。

（平和学習課）

ヒロシマ平和学習受入プログラム —第2回全国平和学習の集い—

はっぴーす!
HAPPY × PEACE

8月5日から7日までの3日間7会場で開催し、全国78自治体（19都道府県）のこどもたち877人、引率者293人、ユース・ピース・ボランティア499人（14自治体（3県））、総計1,619人が参加しました。

ユース・ピース・ボランティアは、集いの本番に向け、6月から4回の研修を行い、ファシリテーション技法の研修では、自由に意見を出し合えるような雰囲気を作り、議論を円滑に進めることが大切だということを学びました。



ファシリテーションを学ぶユース・ピース・ボランティア(第3回研修会)

また、研修の中で今年度のスローガンを話し合い、みんなで投票を行ったところ、「はっぴーす!」に決まりました。これは、「ハッピー」と「ピース」を掛け合わせた言葉で、「人々が笑顔で、人間らしい生活を送ることが平和」、という意味です。「第2回全国平和学習の集い」では、このスローガンを掲載したお揃いの水色のTシャツを着用して全国のこどもたちを迎えました。

「第2回全国平和学習の集い」第1部の「被爆体験講話」では、会場ごとに、梶本淑子さん、笠岡貞江さん、宇佐美節子さん、八幡照子さん、近藤康子さん、岸田弘子さん、内藤慎吾さんの7名の被爆体験証言者



被爆体験講話を聴講している様子

をお招きし、御自身の体験を中心にお話しいただきました。その後の質疑応答では、参加者から様々な質問が寄せられました。

第2部の「グループ・ディスカッション」では、広島大学の鈴木由美子名誉教授、中矢礼美教授、吉田香奈准教授、中井悠加准教授を講師に招き、グループ・ディスカッションの総括・進行をしていただきました。参加者は、6名程度のグループに分かれ、アイスブレイクによって打ち解けた後、それぞれの地域の戦争被害について紹介し合いました。続くグループ・ディスカッションでは、「原爆や戦争の悲惨さを学んだ上で、私たちが日常にできる『平和を築く行動』は

どのようなものがあると思いますか?」というテーマについて、参加者とユース・ピース・ボランティアが、時間をかけて討議を行いました。



グループ・ディスカッションの様子

参加者からは、次のような感想が寄せられています。

〈参加したこどもたち〉

- ・同じ世代の「初めまして」の人と話すのかと緊張したが、ユース・ピース・ボランティアがとても優しく、話題を振ってくれたり、質問をしたりしてくれたのでとても話しやすく、楽しかった。
- ・ディスカッションの際、メンバー全員で一生懸命意見を出し合ったりするのがとても楽しかった。メンバーのみんながフレンドリーで、積極的に発言していたので、自分も「頑張ろう!」という気持ちになった。
- ・北から南まで、自分と同年代のこんなにも多くの人が平和を願い、平和な世界を創りたいという同じ思いを持っていることが分かって、驚くとともに、とてもうれしかった。
- ・同世代との対話や交流を通して連帯や団結を感じ、自信と将来への勇気を持つことができた。
- ・原爆の悲惨さを知り、平和についての考えを深め、平和のために自分ができることが分かった。まずは、家族や友達に伝え、その後、身近なことから平和のために役立つような活動をしていきたい。
- ・世界平和を創るために、自分たちは身近な喧嘩を無くすなど一人一人が行動を始めていくという使命感を強く感じた。学校の朝会で全校生徒に伝え、一人でも多くの人に平和とは何かを考えてもらいたい。
- ・平和な世界とするために、自分たちが日頃学校や家で、どのような関わりや過ごし方をしていけばいいのかを考える機会となった。これからの未来を創っていくのは私たちだという強い意思が芽生えた。

〈引率者〉

- ・全国各地からこどもが集い、対話や交流を深める機会は大変意義深く、こどもの貴重な学びの場となった。多様な考え方や経験に触れることができ、今後

の成長にも大きく寄与する。

- ・地元の戦争被害を異なる地域の同世代に伝えるとともに、他の地域の戦争被害を学ぶことができて、有意義だった。
- ・他の地域の同世代との意見交換は、貴重な体験である。受動的な学びが多い中、自分事として平和について考え、意見を交わすことで深い学びにつながる。
- ・終了後、生徒は、「異なる意見の人と交流する楽しさを知った。」「とても勉強になった。早く地元で発表したい。」と非常にうれしそうに話していた。
- ・グループ・ディスカッションで、こども達が積極的に発言し、真剣に取り組む姿を見て、成長を感じた。
- ・おもてなし役のユース・ピース・ボランティアは、平和への意識も高く、司会や受付などの運営も行っていて、素晴らしかった。また、ユース・ピース・ボランティアが開会前から積極的に声をかけ、場を温めてもらったので、緊張も解け、活発に話し合うことができた。同世代のそのような姿を見て、刺激を受ける生徒も多くいた。
- ・参加したこどもだけではなく、引率した我々も非常に貴重な体験となった。

〈ユース・ピース・ボランティア〉

- ・被爆の実相や現在の核兵器の状況を学ぶことができたことに加え、世界を平和にしたいという私たちと同じ目標を持った他の地域の同世代の仲間から、これまであまり学習したことのない日本各地の戦争被害の状況を聞くことができ、とても有意義だった。
- ・全国の代表者という仲間とともに、平和について意見を交わし、より平和を強く願うようになり、交流

する大切さが理解できた。また、想像していた以上に多様な考え方があり、自分と異なった意見を聞き、自分の意識の外にあった考え方も知ることができた。

- ・他の地域からの参加者との交流を通じて、仲間が増えたように感じた。また、様々な環境で頑張っている同年代の仲間と出会えて、刺激をもらった。平和な世界を創るには、様々な人と交流して、仲間を増やしていくことが大切だと思った。集い終了の際、同じグループの人から「めっちゃ楽しかった」と言われ、やりがいと達成感を覚えた。
- ・学校では習わない平和やファシリテーションの知識やスキルを学び、活動を通して、コミュニケーション能力や傾聴力が向上し、積極性も身に着いた。今後、培った資質・能力を自分の中に留めたままにせず、学校や今後の生活で発揮したい。
- ・これまでは、自分の意見を言うことはあまり得意ではなかったが、活動を通して、初対面の人とも楽しく話せるようになり、また、自分の考えをまとめて上手く伝えることができるようになり、とても楽しかった。
- ・学校の先生に勧められて参加したので、研修前は不安だったが、研修に参加し、意見の異なる人と議論をすり合わせる大切さや多くの人と交流する楽しさを感じた。集いでは、研修前の自分が想像できないくらい成長し、きちんとファシリテーターを務めることができた。貴重な経験で、自分の将来や夢に直結する、自分の可能性を広げられた経験になった。
- ・今後も参加したいし、次は平和についてのイベントを企画・運営したり、海外の若い世代と交流したい。

ユース・ピース・ボランティアのコンピテンシー（資質・能力）を調査したところ、大きく向上していました。

例えば、コミュニケーションスキルでは「よくできている」が19%から65%に、同じくファシリテーションスキルでは14%から54%に向上しました。

令和8年度「ヒロシマ平和学習受入プログラム」紹介動画



ショート・バージョン
(約2分)



ダイジェスト・バージョン
(約5分)



フル・バージョン
(約17分)

若い世代からのメッセージ 2026 (約3分)



仲間づくりにつながった全国平和学習の集い

(平和学習課)

広島平和記念資料館 令和8年度第1回企画展

新着資料展—令和6年度寄贈資料— 8/6の昨日・今日・明日

期間 令和8年10月1日(木)～令和9年2月23日(火・祝)

場所 広島平和記念資料館東館1階 企画展示室

2024年度(令和6年度)に寄贈された949点の資料の中から、179点を紹介します。被爆前、原爆投下直後、被爆後という時間の推移に沿って展示を構成し、あの日を境に激変したヒロシマの姿を浮き彫りにします。

写真家の森本太一さんは、被爆前から戦後にかけて広島市の街の変遷を記録していました。被爆前の写真には、街の様々な情景や、そこで暮らす人々の姿が残されています。寄贈いただいた太一さんのご子息は、「写真から見えてくるものがあるはず。原爆被害の研究や発信に役立ててほしい。」と話し



川釣りー京橋下にて
撮影：森本 太一 寄贈：森本 博之

ました。被爆前のコーナーでは、森本氏が残した原爆で被害を受ける前の豊かで穏やかな“あの頃の広島”の写真とともに、戦時色が強まる中、変化していく人々の様子をご紹介します。

この一輪挿しは、終戦後、満州から帰国した人物が焼野原となった実家の跡から見つけたものです。ご本人は後年、家族に原爆の話はしませんでした。が、「一輪挿しがこんなになるんだから、人間が生きているわけないよね。」と話していたそうです。ご本人が亡くなった後、資料はご子女に受け継がれましたが、今後の継承が難しいことから、「一輪挿しがこんな形になる恐ろしさを感じてほしい。」との思いとともに寄贈されました。

被爆から81年が経過し、被爆者が少なくなっていく中、被爆の実相を伝える資料の重要性はさらに増えています。当館では、こうした資料を後世に継承していくため、引き続き関係者への聞き取りや調査を進めるとともに、皆さまからの貴重な資料のご寄贈をお待ちしております。(平和記念資料館 学芸展示課)



一輪挿し
寄贈：中村 艶子

「ハノーバーの日」・「モントリオールの日」を開催しました

広島市は、海外の6つの都市と姉妹・友好都市提携を結び、交流を行っています。平成13年には、各都市にちなんだ「姉妹・友好都市の日」を定めており、今年も5月に「ハノーバーの日」、7月に「モントリオールの日」と題した記念イベントを開催しました。

【ハノーバーの日】

5月30日(土)の午後、広島駅南口地下イベント広場で開催しました。セレモニーに先立ち、ハノーバー市と関係の深い上田宗箇流のお茶席や、ハノーバー発祥のお酒の飲み方「ルツェラゲ」の紹介、電車のペーパークラフト等、体験型のブース、ソーセージ・ドイツパンの試食に多くの来場者が集まりました。

その後、エリザベト音楽大学サクソ専攻の学生(Amitié Saxophone Quartet)によるコンサート、関係者の挨拶に続き、ヒロシマ・メッセンジャーによるハノー



バー市の紹介コーナーでは、同市および同市の人気観光地である動物園の紹介や、ハノーバー市出身のドイツ人によるドイツ語講座、プレゼントが当たるクイズ等、来場者が参加して楽しめる様々なイベントを行い、老若男女問わず盛り上がりました。通りがかりの来場者も多く、「ハノーバー市についてもっと知りたくなった。」「サクソカルテットが心に響いた。」という声が寄せられるなど、ドイツの文化を体感し、広島市とハノーバー市

の交流の歴史を知っていただく機会となりました。

【モントリオールの日】

7月18日(土)に、LECT(西区扇町)で開催しました。初めての会場ということもあり、より多くの方に気軽に参加していただくことを目的に、ステージイベント、ワークショップ、展示(クイズラリー)、物販を組み合わせ、出入り自由のオープンイベントとして開催し、各ブースに多くの方にご参加いただきました。

ステージイベントでは、大道芸パフォーマンスのほか、在日カナダ大使館首席公使及びケベック州府在日事務所代表を迎え、ヒロシマ・メッセンジャーと共にモントリオールの魅力を紹介するトーク



モントリオールの魅力を語る在日カナダ大使館首席公使(左)とケベック州府在日事務所代表

セッションを実施し、子どもから大人まで幅広い世代に楽しんでいただきました。

また、特にファミリー層に好評だった、缶バッジ作りやミニ手旗等のワークショップをはじめ、開始直後から多くの方が列を作った景品付きのクイズラリー、モントリオールスタイルページの販売など、五感でモントリオールの魅力や文化に触れていただく機会となりました。来場者からは、「モントリオールのことや広島市とのつながりを感じることができた。」といった声が寄せられました。(国際市民交流課)